

中国における日本語学習者のプロフィシエンシーを測る

: ACTFL-OPI を用いて.

曹娜 (上海外国語大学)

キーワード: OPI、専四試験、専八試験、言語知識、口頭言語能力

1. 初めに

ACTFL-OPI は、現在、日本の日本語教育において、口頭運用能力の測定、第二言語習得研究、レベル付き話し言葉コーパスの構築、及び日本語教育現場への活用など、様々な分野に応用されている。しかし、中国の日本語教育においては、ほぼ未知の領域と言っても過言ではない。OPI に関する論文はわずか管 (2013) 及び曹 (2016) のみである。日本語学習者に OPI インタビューを行い、口頭言語能力を測定し、その発話を資料に用いる研究は中国においてあまり見られない。本発表は中国における日本語教育を促進するために、中国で日本語を学ぶ学習者に OPI インタビューを行い、口頭運用能力を把握したい。そして、言語知識の蓄積が言語能力、特に口頭言語能力の育成に役立つのかも把握したい。

2. 先行研究

横山 (他) (2002) では非母語話者日本語教師 91 名に日本語能力試験 2 級と 3 級の過去の問題を各 50% ずつ抽出し、作成した「日能試」、及び ACTFL-OPI のインタビューを行い、そして、二つの試験結果の相関関係を検証してみたところ、相関係数は 0.627 であり、「両テストの間には中程度の相関関係が認められる」と述べられている。しかし、日本語能力試験の 2 級と 3 級のレベルの差が激しく、横山 (他) (2002) で調査に使用されている「日能試」は的確に被験者の言語知識のレベルを測定しているとは言えないと思われる。また、横山 (他) (2002) で調査に使用されている ACTFL-OPI の「中級-上」から「超級」までのレベルは ACTFL-OPI の結果判定では上位五位を占めている。上位五位のレベルのみ使用し、横山 (他) (2002) に使用した二つの試験結果を検証した相関比は、「両テストの間には中程度の相関関係が認められる」とは言えるが、「口頭言語運用能力」と「言語知識」の関係については言及できないと考えられる。従って、的確に日本語学習者が習得している言語知識を測定できる試験、及び ACTFL-OPI の中間レベルを用い、再び「口頭言語運用能力」と「言語知識」との相関関係を測定する必要性が出てくる。

3. 調査に使用した試験

3. 1 中国日本語専門四級試験、中国日本語専門八級試験

中国日本語専門四級試験 (以下は、「専四試験」とする)、中国日本語専門八級試験 (以下は、「専八試験」とする) は 2002 年から行われ、『高等学校日本語専門基礎段階教育綱要』の実施状況、及び各大学における日本語専門教育の質を全面的、客観的、公正的に評価することを目的としている。この二つの試験は主に学習者の聴解能力、言語知識、読解能力、書く能力を測定するものであり、専四試験の受験者は主に二年間の日本語学習が終わる日本語を専門とする大学生とされ、専八試験受験者は主に四年生の上半期が終わる日本語を専門とする大学生とされている。

3. 2 ACTFL-OPI

「ACTFL-OPI」は、ACTFL によって開発された汎言語的に外国語の口頭運用能力を測定するテストのことであり、機能的に話す力を総合的に評価するための、標準化された手順でもある。「ACTFL-OPI」に関する厳密な定義については、牧野（2001：9）では、OPI を「OPI とは、外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテストである」としている。現在、日本語の口頭運用能力が測定できるのは「ACTFL-OPI」のみである。

4. 本調査

4. 1 調査対象と調査方法

筆者が勤めている大学で日本語を専攻した学生 40 人を調査対象とした。2017 年 6 月に専四試験に参加した二週間以内に一回目の OPI インタビュー（以下は、「OPI①」とする）を行い、2018 年 12 月に専八試験に参加した二週間以内に二回目の OPI インタビュー（以下は、「OPI②」とする）を行った。その後、この二回の OPI インタビューの結果について検証しました。専四試験は間隔尺度で、ACTFL-OPI は順序尺度であるため、相関比を用いて、データ間の相関を検証した。

4. 2 OPI①の調査結果

専四試験及び OPI①の結果を下の表 1 にまとめた。

<表 1> 被験者における専四試験、及び OPI①の結果

	優秀	良好	合格	不合格	合計
中-下	2	5	3	1	11
中-中	8	5	3	0	16
中-上	7	4	0	0	11
上-下	2	0	0	0	2
合計	19	14	6	0	40

表 1 より、被験者が ACTFL-OPI による口頭言語運用能力は「中-下」、「中-中」、「中-上」、「上-下」の四つのレベルに分かれていることも明らかになった。このことにより、中国の大学で二年間日本語を専門として勉強すると、被験者全員が「中級」、即ち、「文レベルで無理なく発話できる」というレベルに達していると言えよう。専四試験は 110 点満点であり、88 点以上は「優秀」、77 点～87 点は「良好」、66 点～76 点は「合格」、65 点以下は「不合格」とされている。被験者における専四試験の結果は、「優秀」、「良好」、「合格」、「不合格」各レベルに被験者がいることが分かった。

また、表 1 より、専四試験では「優秀」を獲得した学習者における口頭言語運用能力は「中-下」2 名、「中-中」8 名、「中-上」7 名、「上-下」2 名というばらつきが見られた。このことにより、言語知識が豊富な学生が必ずしも口頭言語運用能力が高いとは限らないことが明らかになった。特に被験者たちは、中国で長年、「受験するための教育」を受け、試験で高得点を獲得するテクニックなどを熟知しているため、口頭言語運用能力が向上していないにもかかわらず、言語知識を測定する試験で高得点を獲得したのではないと思われる。

逆に、ACTFL-OPI では「中-上」及び「上-下」と判定された口頭言語運用能力が高い 13 名の学習者における専四試験の成績は「優秀」9 名、「良好」4 名ということが分かった。このことにより、口頭言語運用能力が高い学習者は言語知識の蓄えが少なくないことが明らかになった。

そして、専四試験の点数と OPI①のレベル判定の間に相関比を用いて、両者の関係を検証したところ、0.333 であり、「やや弱く関連している」ことが分かった。横山（他）（2002）では、認められた「中程度の相関関係」は本調査では見られなかった。

以上のことをまとめると、被験者による専四試験の成績から ACTFL-OPI の判定レベルを予測することは不可能であるが、ACTFL-OPI の判定レベル「中-上」以上の被験者の場合は、ACTFL-OPI の判定レベルから専四試験の結果を予測することがある程度できるのではないかと思われる。今まで、学習者の日本語を評価する際、主に言語知識を測定する試験による成績が用いられたが、本調査より、口頭言語運用能力を用いて学習者の日本語を評価することが一層学習者の日本語を全面的に評価できるのではないかと考えられる。

4. 3 OPI②の調査結果

専八試験及び OPI②の結果を下の表 2 にまとめた。

<表 2> 被験者における専八試験、及び ACTFL-OPI の結果

	優秀	良好	合格	不合格	合計
中-中	0	0	0	6	6
中-上	0	1	3	6	10
上-下	4	10	5	0	19
上-中	1	4	0	0	5
合計	5	15	8	12	40

2018 年に行われた専八試験は 150 点満点であり、120 点以上は「優秀」、105 点～119 点は「良好」、90 点～104 点は「合格」、89 点以下は「不合格」とされている。表 2 より、被験者における専八試験の結果は、「優秀」、「良好」、「合格」、「不合格」各レベルに被験者がいることが分かった。また、被験者において、ACTFL-OPI による口頭言語運用能力は「中級-中」、「中級-上」、「上級-下」、「上級-中」の四つのレベルに分かれていることも明らかになった。このことにより、1 年四か月前に行った OPI①の結果に比較すると、「中-下」が消え、「中-上」が現れた。

また、専八試験から OPI②の結果を見ると、専八試験において「不合格」になった被験者全員は口頭言語運用能力が「中級」と判定され、専八試験において「優秀」を獲得した被験者全員は口頭言語運用能力が「上級」と判定されていることが分かった。これに対して、専八試験において「合格」、「良好」を獲得した被験者は口頭言語運用能力が「中級」と判定されてる場合もあり、「上級」と判定されてる場合もあり、ばらついていることが窺える。しかし、逆に OPI のレベル判定より専八試験を見ると、「中-中」、「中-上」では、専八試験における合格率は 4/16 (25%) であり、上級になると、専八試験に不合格する人はなくなっていることが分かった。即ち、口頭運用能力が「中級」と判定された学習者は専八試験に不合格になる場合が多く、口頭運用能力が「上級」と判定された学習者は全員専八試験に合格していることより、口頭運用能力がより客観的、全面的学習者の日本レベルを測定できると考えられる。

次に、専八試験の点数と OPI②のレベル判定の間に相関比を用いて、両者の関係を検証したところ、0.460 であり、「やや弱く関連している」ことが分かった。横山（他）（2002）では、認められた「中程度の相関関係」は本調査では再び見られなかった。

以上のことをまとめると、被験者による専八試験の成績から ACTFL-OPI の判定レベルを予測することは不可能であるが、ACTFL-OPI の判定レベル「上級」になった以上、ACTFL-OPI の判定レベルから被験者による専八試験の結果を予測することがある程度できるのではないかと思われる。今まで、学習者の日本語を評価する際、主に言語知識を測定する試験による成績が用いられたが、本調査より、口頭言語運用能力を用いて学習者の日本語を評価することが一層学習者の日本語を全面的に評価できるのではないかと考えられる。

最後は、専四試験、専八試験及び「日能試」が ACTFL-OPI との相関比を下の表 3 にまとめた。

<表 3> 専四試験、専八試験及び「日能試」が ACTFL-OPI との相関比

参照試験	専四試験	専八試験	日能試
ACTFL-OPI レベル	中-下～上-下	中-中～上-中	中-上～超級
相関比	0.333	0.470	0.627

表 3 より、専四試験、専八試験及び「日能試」が ACTFL-OPI との相関比はそれぞれ 0.333、0.470、0.627 であり、相関程度が徐々に高まっている傾向が見られた。また、この三試験の調査対象の ACTFL-OPI レベル判定も「中-下～上-下」から「中-中～上-中」、「中-上～超級」まで上昇している。従って、調査対象の口頭運用能力が高いほど、言語知識の蓄積が口頭言語能力との相関比が高くなると思われる。横山 (2002) で見られた「中程度の相関関係」が本発表で見られなかった原因は、横山 (2002) で日本語言語知識の蓄積が豊富で、口頭言語運用能力が高い日本語教師を調査対象に用いたためではないかと思われる。

5. まとめと今後の課題

以上のことを踏まえて、調査対象の口頭運用能力が高いほど、言語知識の蓄積が口頭言語能力との相関比が高くなることが分かった。また、本発表により日本語学習のどの段階においても、言語知識の蓄積が豊富な学生は必ずしも口頭言語運用能力が高いとは限らないが、口頭言語運用能力が高い学習者における言語知識の蓄積が豊富であることが明らかになった。そして、日本語学習の初級段階において、大量の言語知識を教えるにも関わらず口頭言語運用能力が高まらないため、大量の言語知識の伝授は初級ではなく、中上級に入ってからにすれば、効果的ではないかと思われる。今後は、ACTFL-OPI レベル別に学習者の発話の特徴を詳しく検証したいと思う。

参考文献

- 牧野成一・鎌田修・山内博之・齋藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子 (2001) 『ACTFL-OPI 入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る—』, アルク
- 横山紀子・木田真理・久保田美子 (2002) 「日本語能力試験と OPI による運用力分析—言語知識と運用力と関係を探る」, 『日本語教育』113 号, pp. 43-52, 日本語教育学会
- 管秀兰 (2013) 「建构主义理论在日语口语教学中的应用实践研究—基于与 OPI 日语口语教学模式的结合」, 《日语学习与研究》(3), pp. 62-69, 《日语学习与研究》编辑委员会
- 曹娜 (2016) 「ACTFL-OPI 在日本日语教育界的应用对中国的借鉴意义分析」, 《日语学习与研究》(2), pp. 48-56, 《日语学习与研究》编辑委员会